

## 日本文学研究会

平成二十八年二月十七日

### 世阿弥の定家受容

教授 齋藤 彰

世阿弥の定家受容について、世阿弥の和歌観を確認し、定家詠と定家偽書の受容の観点から分析した。先ず、立合能に勝つ為の自作能の必要性と言葉の幽玄の為の世阿弥の和歌観を認めた。次に、最上位の妙花風即ち離見の見の比喩として、閑寂であるが優美さがある「雪の夕暮れ」を受容し、晩年の世阿弥能のクセ（一曲の中心）や上歌（叙情や心情）に定家詠を受容していることを認めた。また、世阿弥晩年の能における後ジテの舞の〈白光清浄な柔和な余情ある幽玄美〉を形容する〈雪を廻らす〉の論理として世阿弥偽書（真作とされていた）の『三五記』の受容を認めた。また、離見の見に現れる幽玄體の皮を理想として、〈皮肉骨〉の論理の世阿弥偽書の『愚秘抄』の受容を認めた。

### 初期村上春樹と物語

教授 太田 鈴子

村上春樹は長編小説三作目である「羊をめぐる冒険」執筆に際し、小説の方法を、自己告白ではなく物語を構築することとし、以降、その方法で短編、長編とも創作をしてきた。物語創作を選択したことは、物語を媒介として世界に読者を広げていくことにもなった。近代小説に物語の方法を導入することについては、一九七〇年代より積極的に行う作家が登場しており、賛否論じられている。これらの物語批判論、賛成論を紹介し、村上春樹の物語の特色を、日本的なるものと合わせて明らかにしようとした。